

2021年  
5月8日(土) 14:00~

日本学術会議・日本繁殖生物学会 共催  
SRD オンラインセミナー

# SDGsにおける繁殖生物学の役割

2015年に国連によって採択されたSDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）と繁殖学がどのように関わっているかをご紹介します。

進行

日本繁殖生物学会 理事長  
名古屋大学大学院生命農学研究科 教授

東村 博子

広島大学大学院統合生命科学研究科 教授

## 島田 昌之 繁殖生物学の基礎研究から健康と福祉、食料生産への貢献

SDGsの17目標において、①貧困をなくそう、②飢餓をゼロに、③すべての人に健康と福祉を、にかかわる研究を行っています。具体的には、年齢に伴って成人病が増加しますが、その原因が生殖器官の機能破綻に起因すると考えて、その予防法の開発を試みています。食に関しては、家畜の繁殖成績を上げる人工授精技術、動物性たんぱく質を宗教上の問題にかかわらず摂取できるようにする雌雄産み分け技術の開発を行っています。

山形大学大学院農学研究科 教授

## 木村 直子 卵巣寿命の延伸へのアプローチ ～豊かな食料生産、多様なライフサイクルを目指して～

ヒトを含む哺乳類雌の卵巣では、胎仔後期から出生前後にかけて、一生涯分の卵子が形成され備蓄されます。雄と異なり、出生後は新たな配偶子生産ができない雌の卵巣機能を可能な限り長期的に維持し、質の良い卵子を保持することは、産業動物の生産性の向上や、多様な女性のライフサイクルに繋がると期待されます。今回のセミナーでは、マウスをモデルに、卵巣内の備蓄卵胞数を増やすためのいくつかの検証実験をご紹介します。

農研機構 畜産研究部門 上級研究員

## 阪谷 美樹 地球温暖化と家畜繁殖 ～牛が増えると温暖化が進む？～

国連が2015年に制定したSDGs（Sustainable Development Goals）の17の目標の中には気候変動に関わる項目があります。気候変動の中で最も問題視されているのは地球温暖化です。その原因に農業・畜産が大きく関わっていることはあまり知られていないと思います。今回は地球温暖化に関わる畜産の影響とその対策について家畜繁殖学の観点からお話しさせていただきます。